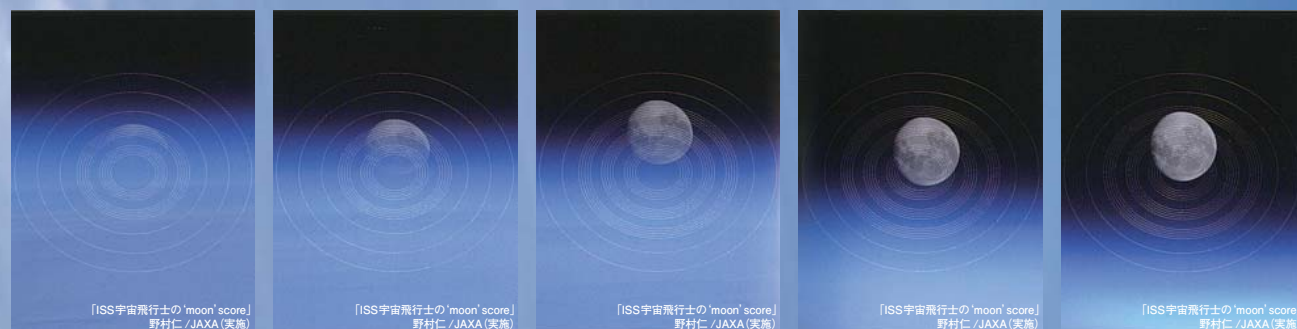


地球の大気をかすめて昇る月

国際宇宙ステーションから撮影された月の写真。
国際宇宙ステーションの文化・人文社会科学利用パイロットミッションの一環として宇宙飛行士が月を撮影した写真により「ISS宇宙飛行士の'moon' score」が生まれ出された。作品の詳細と、提案代表者である京都市立芸術大学の野村仁教授のコメントを次ページで紹介する。



'moon' score : ISS Astronaut

2009(09) 21:13.54.43 - 21:17.57.34

Hitoshi Nomura
Tetsujiro Sasaki



野村仁

NOMURA Hitoshi

現代芸術家。京都市立芸術大学教授。同大学とJAXAの共同研究「宇宙への芸術的アプローチ」のメンバーを務める。ISS（国際宇宙ステーション）の文化・人文社会科学利用パイロットミッションでは「ISS宇宙飛行士の'moon' score」と「光るニューロン」の2テーマの提案代表者。

'ISS宇宙飛行士の'moon' score」の舞台裏

野村仁の代表作の1つであり、東京国立近代美術館にも収蔵されている「'moon' score(月の譜)」は、「夜明け空の白い月が、電線に重なって音符のように見えた」ことがきっかけで生まれた作品だ。

着想を具体的な作品として定着させるために野村は、あらかじめ五線をフィルムに撮影しフィルムを巻き戻してから、300mmの望遠レンズで手持ちで月を撮影する。

手持ちだから月の位置はコマごとに動くし、当然手ブレも起きる。だが、だからこそ、フィルムを現像すると、たしかにそこには月が音符となって五線譜に踊る、楽譜のようなものとなっていた。さらにそれを展示したところ、「カップルがそれを眺めながら歌っている。コーラス部の人たちだという。2段に並べた月の譜を、それぞれ高音と低音のパートにしてハミングしていたんです。ああ、こんなこともできるんだと逆に教えられました」（野村氏）

本来なら聞こえるはずのない——気づかなければ存在すらしない——「月の調べ」が、芸術家の手で採譜され、音楽として再現されたのである。

そしてこの手法をさらに発展させた作品が、「文化・人文社会科学利用パイロットミッション」の10テーマの1つとして実施された「ISS宇宙飛行士の'moon' score」である。

ISSの窓を通して撮された月の写真は、若田光一宇宙飛行士やNASA（米国航空宇宙局）の宇宙飛行士など複数の手によるもの。

「若田さんは800mm相当の超望遠レンズで、いい写真を撮ると、個人の自由時間まで費やしてもらったと聞いています。」

地球の大気の淡くはかないグラデーションや、そこから昇る不思議にひしゃげた月もそれだけで見応えのある作品だが、野村

はそこに今度は、楕円形の五線を書き入れた。これはおそらく上下のない宇宙空間に合わせてのことでもあろう。

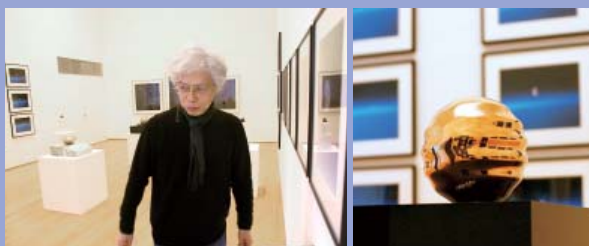
素晴らしい解像度で撮しとどめられたクレーターや月の海を音符に見立て、クレーターにマリimba、海にチェンバロの音色を割り当て、さらにフルート(月の位置)やチェロ(大気層)も加えて演奏された「音楽」も、写真や譜面とともに作品の重要な一部をなす。展示会場ではヘッドホンで聴き、意外にも意味ありげな旋律がいくつも隠されていたことに、新鮮な驚きを感じることができた。

京都市立芸術大学とJAXA(当時、宇宙開発事業団)は1996年から協力関係を築き、作品制作や芸術家による宇宙飛行士へのインタビューなど共同研究を行ってきた。今回の作品も、芸術と宇宙の交流を通して生まれた、日本ならではのユニークな成果の1つといえるだろう。

若田宇宙飛行士から、「プロジェクトに参加させていただきありがとうございます」という直筆のメッセージを受け取った野村は、最後にこう語った。

「見たり聴いたり、知ったことだけでは芸術活動というものには限界があります。科学者やエンジニアや宇宙飛行士の努力のおかげで、宇宙という新しい芸術のフィールドを用意してもらい、そのおかげで私は美しく楽しい作品を制作できました。貴重な宇宙飛行士の時間を使って、このような美しい写真撮影をしてもらうことの困難さまでは提示されていませんが、月と大気をこのタイミングで捉えるにはシミュレーション等、JAXAさんの周到な準備があつてのことです。作品を鑑賞してもらう折には、そういうところも知ってもらえればと思います。」

(写真・文／喜多充成、文中敬称略)



2009年度京都市立芸術大学退任記念「野村仁：宇宙から見る、ここから……」の会場で撮影。中央の写真は、作品「振動する光」

